

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530799

研究課題名(和文) パネル調査に基づく家族システムの発達と移行に関する研究

研究課題名(英文) The development and transition of family systems

研究代表者

石盛 真徳 (Ishimori, Masanori)

追手門学院大学・経営学部・准教授

研究者番号：70340453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：子育て期を終了する前後の家族システムの発達と移行を明らかにすることを研究目的として、家族成員全員が同居しており、かつ末子が高校生の4人家族の父親と母親を対象に調査を実施した。最終的に223組の夫婦(夫の平均年齢49.7歳、妻の平均年齢47.1歳)から有効な調査の回答が得られた。夫婦関係が家族システムにどのような影響を与えるのかについてマルチレベルSEMにより検討した結果、夫と妻の各自が夫婦関係の問題に関して、夫婦関係内で積極的に解決しようと積極的にアプローチすることは、家族の安定性を高める効果を持つことが示された。

研究成果の概要(英文)：Associations between behavioral patterns including conflict resolution strategies, degree of communication, and degree of coercion of married couples in midlife (N =223) and their marital satisfaction, subjective well-being, and stability of family system were investigated. Results of multilevel structural equation modeling (ML-SEM) indicated that degree of communication between married couples was positively associated with marital satisfaction at the dyadic level, whereas coercion with the spouse was positively associated with marital satisfaction at the individual level. Moreover, marital satisfaction was positively associated with subjective well-being at both individual and dyadic levels.

研究分野：社会心理学

キーワード：家族システム 夫婦関係 中年期 主観的幸福感 マルチレベル分析

### 1. 研究開始当初の背景

社会心理学や臨床心理学における家族システム論では、家族をその成員が相互作用関係にあるひとつの複合体、すなわちシステムと捉え、病理の原因を「患者」個人にではなく、家族システムの構造や機能の不全に求める臨床上の視点の転換が生じている。そして家族システム論に基づき、家族システム全体の診断を目的として、1970年代後半以降多くの尺度が開発され、実証的研究が進められてきた。しかしながら、それらはスナップショット的な一時点でのデータに基づく研究がほとんどであり、時間的な流れの中での、家族システムの変化について十分には捉えられていなかった。また最近では、家族システム論は、心理学の領域を超えて、たとえば、家族システム看護という他分野での実践的取り組みにも用いられるようになってきている。たとえば、その代表的なアセスメントモデルである、カルガリー家族アセスメントモデルにおいては、家族構成、ジェンダー、順位といった従来の家族システム論で取り扱われていた家族システムの内的構造だけでなく、拡大家族やより大きなシステムといった外的構造、あるいは、民族性や宗教などの状況要因も取り入れた包括的なアプローチが試みられるようになって来ている。しかしながら、家族システム看護モデルの取り組みは先進的ではあるものの、心理学的な観点からみて、十分に厳密な計量的検討が行われてはいないのが現状であった。

### 2. 研究の目的

これまでシステムとしての家族の柔軟性・安定性については、社会心理学や臨床心理学等の分野で研究されてきたが、スナップショット的な一時点でのデータに基づく研究がほとんどであり、時間的な流れの中での、家族システムの変化について十分には捉えられていなかった。そこで、本研究では、子育て期を終了する前後の家族を対象としてパネル調査を実施し、家族システムの発達と移行について、明らかにすることを目的とする。なお、その際、家族システムの安定性は家族成員間の関係のみで完結するものではないと考えられることから、各家族成員が地域に持つ社会的ネットワークも視野に入れて、統合的な実証的検討を行うことが本研究の目的である。具体的には、子育てを終了しつつある家族において、家族成員の独立によってどのように家族の境界が再形成され、地域コミュニティとの関わりが変化するのかに注目して、基礎的理論と蓄積された実証的データにもとづいた検討を行う。

### 3. 研究の方法

社会心理学のみならず社会学を専門とする研究者とも連携して家族システム論とコミュニティ・ネットワーク論に関連する分野における理論的研究を行った。そして文献研

究で明確にされた問題点を実際の質問項目へと落とし込み、3年の間隔をあけて、平成24年度と27年度の2時点でのパネル調査を実施した。そして、第1次と第2次のパネルデータの両方を利用して時系列重回帰分析等の統計解析を行い、子供の自立に伴い家族システムの安定性がどのように変化するのかを検討し、またその家族システムの安定性と個人のウェルビーイングに地域コミュニティでの知人や友人とのネットワークがどのように影響しているのかについても明らかにした。

### 4. 研究成果

(1)平成24年度の第1次パネル調査では、家族成員全員が同居しており、かつ末子が高校生の4人家族の父親と母親を対象に調査を実施した。最終的に223組の夫婦(夫の平均年齢49.7歳、妻の平均年齢47.1歳)から有効な調査の回答が得られた。夫婦関係のあり方を測定した夫婦関係に関連する要因が夫婦関係満足度、主観的幸福感、および家族の安定性のそれぞれに対してどのような影響を与えるのかについて、マルチレベルSEMを用いて分析を行った。夫婦関係満足度についての分析結果では、夫婦関係内アプローチが、夫と妻それぞれの夫婦関係満足度と夫婦間レベルでの関係満足度も高めることを示すものであった。夫婦満足度に影響を及ぼしていたその他の要因としては、夫婦の共行動が個人レベルでの夫婦関係満足度を高め、夫婦のコミュニケーションが2者関係レベルでの夫婦関係満足度を高めているという結果であった。この結果は、個人レベルで、夫婦共行動の頻度が高いと認識しているだけでは、個々人の夫婦関係満足度にしかならないのに対して、夫婦のコミュニケーションが充実していると夫と妻がともに高く認知していることは、夫婦間のともに高い夫婦関係満足度につながることを示している。したがって、夫婦で一緒に行動しているだけでは、夫婦間での夫婦関係満足度を高めるのには十分ではなく、夫婦間でのコミュニケーションの充実が必要であることを意味している。この結果は従来のアプローチからでは明らかにならなかった知見であり、マルチレベル分析の特性が十分に発揮されたものといえる。

(2)平成27年度の第2次パネル調査では、第1次パネル調査で調査協力者であった223組の夫婦を対象に調査を実施した。その結果、71組142名の夫婦から回答が得られた。2時点でのデータについて、マルチレベルSEMを用いて分析を行った結果、個人レベルと夫婦関係レベルの両方において、第1次調査時点の夫婦関係満足度と家族安定性はともにそれぞれ、第2次調査時点での夫婦関係満足度と家族安定性に有意な正の影響を及ぼしていた。この結果は、個人の認知レベルと夫婦

での一致した認識の両方における、夫婦関係満足度と家族安定性の高さが3年後にも影響を及ぼしていることを示すものであった。ただし分析の対象となったのは、3年の間隔をあけても、夫婦そろってパネル調査に参加してくれたサンプルであるため、安定性については多少のバイアスの存在を考慮しなければならぬと考えられる。

(3) 子育て期を終了しつつある夫婦関係では、それぞれが夫婦関係外、具体的には地域コミュニティや個人の趣味的活動において活発に行動することも夫婦関係満足度を高め、ひいては家族システムの安定性を高めていることが示された。ただし、夫婦そろって夫婦関係外で積極的な行動をとることは家族の安定性を損なう傾向にあることが示された。この結果は「家族システムへの様々な出入りを受け入れること」という発達課題に対して、夫婦がコミュニティとの関係を再編成することや自らの新たな関心事を追求することで、個人および家族システムの適応を図っていることを示したものと見える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計9件)

石盛真徳 2015年9月23日 夫婦ペアデータのマルチレベルSEMによる分析(公募シンポジウム「ペアデータによる2者関係の相互依存性へのアプローチ」話題提供) 日本心理学会第79回大会 名古屋国際会議場

清水裕土・石盛真徳・藤澤隆史・小杉考司・渡邊太 2015年9月22日 家族システムの発達と移行に関する研究(7) 家族ネットワークの共有とズレが精神的健康に及ぼす影響 日本心理学会第79回大会 名古屋国際会議場

小杉考司・清水裕土・石盛真徳・藤澤隆史・渡邊太 2015年9月22日 家族システムの発達と移行に関する研究(6) 家族システムとしての安定 日本心理学会第79回大会 名古屋国際会議場

藤澤隆史・小杉考司・清水裕土・石盛真徳・渡邊太 2015年9月22日 家族システムの発達と移行に関する研究(5) 社会経済状態指標(SES)との関連 日本心理学会第79回大会 名古屋国際会議場

性・柔軟性 日本心理学会第79回大会

石盛真徳・小杉考司・清水裕土・藤澤隆史・渡邊太 2015年9月22日 家族システムの発達と移行に関する研究(4) 地域生活満足度および居住継続意図への影響要因の検討 日本心理学会第79回大会 名古屋国際会議場

石盛真徳・小杉考司・清水裕土・藤澤隆史・渡邊太 2014年9月7日 家族システムの発達と移行に関する研究(3) 夫婦ペアデータのマルチレベル相関分析 日本グループ・ダイナミクス学会第61回大会 東洋大学白山キャンパス

小杉考司・石盛真徳・清水裕土・藤澤隆史・渡邊太 2013年9月19日 家族システムの発達と移行に関する研究(2) 家族関係データからみる家族のイメージについて 日本心理学会第77回大会 札幌コンベンションセンター

石盛真徳・小杉考司・清水裕土・藤澤隆史・渡邊太 2013年9月19日 家族システムの発達と移行に関する研究(1) 父親と母親のネット利用の積極性と夫婦間・家族内コミュニケーションおよび地域コミュニティでの参加・交流との関連 日本心理学会第77回大会 札幌コンベンションセンター

小杉考司・清水裕土・石盛真徳・藤澤隆史・渡邊太 2013年9月6日 家族関係データに対する非対称MDSの応用(2) 日本行動計量学会第41回大会 東邦大学習志野キャンパス

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

石盛 真徳 (ISHIMORI, Masanori)  
追手門学院大学・経営学部・准教授  
研究者番号: 70340453

##### (2) 研究分担者

小杉 考司 (KOSUGI, Koji)  
山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：60452629

清水 裕士 (SHIMIZU, Hiroshi)  
関西学院大学・社会学部・准教授  
研究者番号：60621604

渡邊 太 (WATANABE, Futoshi)  
大阪国際大学・人間科学部・講師  
研究者番号：80513142

藤澤 隆史 (FUJISAWA, Takashi)  
福井大学・子どもこところの発達研究センター・特命助教  
研究者番号：90434894